

ナチズムの言語をめぐる言語意識

—V. Klemperer の『第三帝国の言語』(1947)に基づく一考察—¹⁾

細川 裕史

「神は私に弁舌の力を与え給うたのだ。私の説教を聞いたら、あんたもうっとりして我を忘れるだろう」²⁾ブレヒト

1. はじめに

「ドイツ第三帝国」時代の映画といえば、『意志の勝利』(*Triumph des Willens*, 1934) や『オリンピア』(*Olympia*, 1936) といったレニ・リーフェンシュタール (Leni Riefenstahl, 1902-2003) の政治的プロパガンダのためのドキュメンタリー映画を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。しかし、統計的にみれば、アドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler, 1889-1945) 率いる NSDAP (Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei, 国家社会主義ドイツ労働者党) が政権をになっていた時代に製作された映画は、むしろ気楽に観られる非政治的な娯楽映画が大半だった³⁾。このように、後世を生きる我々には、ある時代の印象深い側面や「代表的」と思われる現象が強調されて認識されることがある。

ドイツ語史研究の分野に社会言語学的な視点を導入した最初期の研究者である Hans Eggers は、もっぱら、各時代において代表的とみなされる社会層 (中世における騎士階級や近代における教養市民層など) が使用した言語に重点をおいてドイツ語史を記述している⁴⁾。「第三帝国」の時代に関していえば、NSDAP とその影響下にあった組織や集団が、この時代において代表的とみなされる社会層にあたるだろう。そして、とりわけ、ヒトラーやヨーゼフ・ゲッベルス (Joseph Goebbels, 1897-1945) の演説における言語が、この時代の代表的な言語とみなさ

1) 本研究は、科学研究費補助金基盤研究 (C)「想起する帝国—ナチス・ドイツにおいて想起された『過去』の研究」(研究代表者：溝井裕一)の助成をうけて行われた。

2) ブレヒト、ベルトルト (2004)『肝っ玉おっ母とその子どもたち』(岩淵達治訳)、116 ページ。

3) 当時製作された劇映画約 1,100 本のうち、約 50%が「非政治的な娯楽映画」、とりわけ音楽物や歴史物だった。これに対し、「シリアスな(潜在的に政治的な)映画」は 27%、「顕在的に政治的な映画」は 14%しかない。Vgl. Reichel 1999: 181, 195.

4) Vgl. Eggers 1963: 12ff.; Mattheier 1998: 16.

れている。彼らが使用した言語については、ヒトラーの同時代人であるロマンス語学者ヴィクトール・クレンペラー (Victor Klemperer. 1881-1960) が、„LTI“ (Lingua Tertii Imperii、第三帝国の言語) と名付けて以来、「第三帝国の言語」と呼ばれている⁵⁾。そして、クレンペラーから現代の言語学者にいたるまで多くの研究者によって、語彙レベルから語用論的なレベルにいたるまで、さまざまな次元から考察されてきた⁶⁾。たとえば、高田 (2011) では、約 150 万語という巨大なコーパスに基づいて 1920 年から 45 年にかけてのヒトラーの演説が分析されている⁷⁾。

一方で、近年のドイツ語史研究の分野においては、代表的とみなされる社会集団の使用した言語だけでなく、これまではあまり研究対象とはされてこなかった非特権階級が日常的に使用していた言語にも関心がむけられている。また、使用されていた言語そのものだけでなく、言語に対する時代ごとの知識や認識、つまり、以下に詳述する「言語意識」(Sprachbewusstsein) にも注目が集まっている⁸⁾。そこで、本論では、「第三帝国の言語」という語を生み出したクレンペラーの著書『第三帝国の言語 (LTI) —ある言語学者のノート』(LTI. Notizbuch eines Philologen. 1947) に基づきながら、クレンペラーと同時代の非特権階級に属する人々が抱いていた「第三帝国の言語」に関する言語意識の側面を考察する。その際、とくに注目するのは、以下の2点である。

1. 「第三帝国」の時代を生きたドイツ語母語話者にとって、どのような言語的特徴が「第三帝国の言語」として認識されていたのか。
2. 同時代人の間で、「第三帝国の言語」に関する言語意識に、どのような差があったのか。

なお、クレンペラー自身が述べているように、„LTI“という語そのものが外来語や略語を多用する「第三帝国の言語」のパロディとなっている⁹⁾。したがって、「第三帝国の言語」と訳してしまうと、本来„LTI“が持っていたパロディとしての機能を失ってしまうことになるが、訳書のタイトルにも表れているように「第三帝国の言語」という訳が定着しているように思われるので、本論では一貫してこの訳

5) その他にも、「ナチの言語」(NS-Sprache) といった名称なども使用されている。Vgl. Polenz 1972: 164.

6) 例えば、宮田 1991: 140ff. および羽田他 2000 [1974]: 420ff. 参照。

7) 高田 2011: 90 参照。

8) Vgl. Polenz 2000: 13; Elspaß 2005: 15f.

9) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 18f.

語を使用する。

2. 言語意識研究と『第三帝国の言語』

『第三帝国の言語』では、代表的とみなされる社会集団、ヒトラーやその腹心たちが使用した言語だけが扱われているわけではない。たしかにクレンペラーは、ヒトラー政権下で「使用が許される言語を決めるのは、結局のところ、ゲッベルスただひとりだったのだろう」(Klemperer 2009 [1947]: 35¹⁰)と述べ、「われわれのドクトル [ゲッベルス] は、大衆の言語と思想の形成者である」(312)として、その言語を重視している¹¹⁾。しかし、その一方で、『第三帝国の言語』においては、NSDAPに迫害されていたユダヤ人同士の会話や、「ナチズムと距離をとっていた同時代の人々」(109)の認識にも多くのページがさかれている。この著書で扱われているのは、つまり、クレンペラー自身が「第三帝国」との結びつきを見出した、様々な使用状況における様々な言語についての知識や認識の総体なのである。こうした知識や認識の総体は、社会語用論的語史研究の分野では「言語意識」として扱われている¹²⁾。

言語意識は、Scharloth (2005)によれば、「錯綜した (verworren) 認識」である「前学問的なメタ言語的付随意識 (das vorwissenschaftliche metasprachliche Begleitbewusstsein)」、「非十全な (inadäquat) 認識」である「日常的な言語意識」、「十全な (adäquat) 認識」である「学問的な言語意識」という3つの形成段階に区分されるが¹³⁾、「学問的な言語意識」をのぞけば、研究可能な資料(文法書など)として後世に残されることが少なく、研究対象になりづらい。

『第三帝国の言語』は、その副題に「ある言語学者によるノート」とあるように、言語の専門家の手による「学問的な言語意識」の記述に比重がおかれている。クレンペラー自身、「第三帝国の言語」にたいしては「一人のインテリとして判断する」(94)と明言している。このインテリとしての自意識は、クレンペラーの「ヒトラーは独学者であり、半人前どころか、よくて10分の1人前の教養しかない」

10) 以下、同書からの引用にさいしては、該当するページ数のみを表記する。なお、翻訳は筆者によるが、その際、クレンペラー(2000 [1974])における羽田洋他の訳を参考にした。

11) Vgl. Fahrke 2008: 8, 18.

12) 細川 2009: 68, 74f., 81ff. 参照。

13) Vgl. Scharloth 2005: 14.

(340) という言及にも表れている。クレンペラーは自らの言語意識が「一般大衆」のものとは違うと認識しており、また、言語の記述にあたってはその発話者がインテリ階層に属しているのか「狭義の民衆層」(148)に属しているのかを区別している¹⁴⁾。当時は「元大学教授」という立場だった彼にとって、迫害される立場になっても学術的なことをしているという認識は、心の支えになっていたようだ。クレンペラーは「第三帝国の言語」を「大きな、まったく博士論文になりそうなほどのテーマ」(112)と呼び、それを調査し考察することを彼の「補習授業」(168)と呼んだ。また、ユダヤ人であったために入手できる資料が限られていたとしながらも、自らの認識が単なる印象ではなく、かつて自らが大学教授として行っていたゼミナールでの調査と同様に、新聞などの印刷メディアをコーパスとした統計調査の結果であると、繰り返し強調している¹⁵⁾。

しかし、クレンペラーは、自らが「学問的に」考察した言語意識だけでなく、自らや言語学の専門家ではない同時代人の抱いていた「日常的な言語意識」についても記述している。たとえば、強制就労に従事するユダヤ人たちの「日常の会話」(Alltagssprechen) (263) や、クレンペラー自身と(「アーリア系」)ドイツ人たちとの会話に多くのページがさかれている¹⁶⁾。これは、おそらく、ヒトラーの著書『わが闘争』(*Mein Kampf*, 1925/26)も研究していたクレンペラーが、ヒトラーには「ある民族の大衆による強力な力がなければどんなに高く崇高におもえる偉大な思想も実現しない、という簡潔な認識」(Hitler 1939 [1925/26]: 117)があったことを熟知しており、「第三帝国の言語」の目標が少数のインテリではなく大衆層の取り込みにあると認識していたからだろう¹⁷⁾。この点から、『第三帝国の言語』は、同時代の言語意識を多角的に考察するうえで有用な資料といえる。

その一方で、クレンペラー自身も述べているように、ユダヤ人である彼による記述には偏りがみられる、ということも意識しなければならない。クレンペラーは、もともと熱心なユダヤ教徒ではなく、また1903年にはプロテスタントに改宗している¹⁸⁾。しかし、彼は、いかに言語学者として客観的に「第三帝国の言語」

14) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 148, 248.

15) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 78, 94ff., 109f., 112, 166.

16) Vgl. Elbers 1999: 30; Fahrke 2008: 17; Klemperer 2009 [1947]: Kap. 18, Kap. 27, Kap. 28.

17) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 26, 152, 262.

18) Vgl. Elbers 1999: 23f., 91; 羽田他 2000: 427f.

を記述しようと努めたところで、自らが「ユダヤ人の眼鏡」(245) でのものを見ていることを、スターリングラード陥落後(1943)のこととして、以下のように告白している。

言語学者として、あらゆる状況や集団における言語的に特殊なことを観察し、自らは何の色にも染まらずに中立に話そうと常に努力してきたが、私も周囲の環境に染められていた。(245)

クレンペラーは、『第三帝国の言語』で彼がとりあげた語彙や語法にユダヤ関連のものが多いのは、彼が「ユダヤ人の眼鏡」で当時のドイツ語を見ていたからではなくナチズムそのもののせいであるとも述べているが、そこには明らかにユダヤ人としての主観がこめられている。次の引用は、固有名詞について書かれた章からのものだが、ユダヤ人収容所があった地名についての記述につづく一文である。「またしても、ユダヤのテーマになってしまった。これは私のせいだろうか？ いや、これはナチズムのせいであり、まったくナチズムのせいである」(112) いずれにせよ、ドレスデンの大空襲後(1945)の避難生活中には、彼自身も、自らが「第三帝国の言語」とみなしていた語彙を無意識に使用していた。たとえば、「(不正な手段を使って) 手に入れる」という意味での„organisieren“など¹⁹⁾。また、「(秘密国家警察が) 連行する」という意味での„holen“という語を自分が使用したことについて、彼は驚きをもって記述している。「„Holen“だって！ 今ではもう、私もこの言語〔第三帝国の言語〕で話している！」(366)

したがって、『第三帝国の言語』に基づいて当時の言語意識を考察するさいには、とりわけユダヤ関連のテーマが扱われている場合には、記述者クレンペラーにかかっているバイアス、彼やその知人のいう「ユダヤ人の眼鏡」を考慮に入れる必要がある。

3. 「第三帝国の言語」に関する言語意識

言語意識は、言語に関するどのような知識を扱っているのかによって、3つのレベルに分類される。すなわち、語彙や統語構造などに関する知識を扱う「言語

19) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 139.

の構成単位のレベル」、言語や言語変種の使用に関する語用論的な知識を扱う「コミュニケーション実行のレベル」、そして、言語がもつ社会シンボル機能に関する知識を扱う「アイデンティティ構成のレベル」である。この3つのレベルを、本論では、Kilian (2005) のより簡潔な術語に合わせ、それぞれ「言語構造の次元」、「語用論の次元」、「社会言語学の次元」と呼ぶことにする²⁰⁾。

3.1. 言語構造および語用論の次元

言語構造の次元に関しては、『第三帝国の言語』においては語彙に関する記述がとくに多いため、おもにクレンペラーが指摘した語彙を考察する。また、言語使用者の意図や規範意識を扱う語用論の次元も、これらの語彙と密接な関係にあるため、合わせて考察する。

3.1.1. 略語

冒頭で触れたように、クレンペラーが「第三帝国の言語」をわざわざ„LTI“と表記したのは、„BDM“ (= Bund Deutscher Mädel. ドイツ少女同盟) や„HJ“ (= Hitlerjugend. ヒトラーユウゲント)、„DAF“ (= Deutsche Arbeitsfront. ドイツ労働戦線) といった略語を多用する「第三帝国の言語」のパロディだからである²¹⁾。略語は、「第三帝国」において極端なまでに多用され、1944年には、こうした略語の乱用に対する警告が一般向けの公文書に掲載されるほどだった²²⁾。こうした略語の使用は、迅速な情報伝達が求められる現代社会一般にみられる傾向であり、ドイツにおいても NSDAP の政権獲得以前から定着していた²³⁾。また、クレンペラーはその流行の大元を、イギリスやアメリカなどの工業先進国にみており、国民全体を機械化、組織化しようとするナチズムに都合の良い語彙だったため多用されたとしている²⁴⁾。

語用論の次元に関していえば、宮田 (1991) によれば、こうした略語は「いっさいのプログラムを隠蔽しようとする意図からも」(宮田 1991: 160) 使用されて

20) Vgl. Kilian 2005: 13; Scharloth 2005: 12ff.

21) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 18.

22) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 121, 125.

23) Vgl. 宮田 1991: 160; Klemperer 2009 [1947]: 122.

24) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 124ff.

いた。クレンペラーは、1930年代半ばという早い段階からすでに、ベルリンでは略語の多用によるこの隠蔽工作が「喜劇」(120)とみなされており、大衆の笑いの種になっていたことを指摘する。彼らは、„Knif!“ (= Kommt nicht in Frage! 問題外だ!) やその強調形である„Kakfif!“ (= Kommt auf keinen Fall in Frage! まったく問題外だ!) といった略語を造語し、「第三帝国の言語」を嘲笑した²⁵⁾。略語に対する警告が政府によってなされた背景には、政府の意図とは異なり、略語の多用が滑稽なものとして大衆に認識されていた、という事実も影響しているのかもしれない。

もっとも、略語がただ滑稽なものとしてのみ認識されていたわけではない。„SA“や„SS“は(とりわけ、ヒトラー政権下では„SS“を表記するために特別な活字が使われており)、本来はそれぞれ„Sturmabteilung“ (突撃隊) と „Schutzstaffel“ (親衛隊) の略語であったが、「第三帝国」の時代の人々にとっては、それらの語の略語としてではなく、独自の意味をもつ語として認識されていた²⁶⁾。„SS“という語は、彼らにとって、何らかの近衛隊や親衛隊を指す語(の略語)ではなく、ヒトラーの指揮下にある特定の組織のことだけを指すようになったのだ。クレンペラーは、「第三帝国は、その言語を自らの手ではごく少ししか造らなかったか、ひょっとすると、いや、きっと、まったく造らなかった」(27)と断じているが、„SS“が「親衛隊」を意味する一般名詞の略語であると認識していない彼の同時代人にとっては、„SS“は新たに造りだされた語であったと見なせるだろう。

3.1.2. 外来語

„LTI“という表記は、„Bürge“ (引受人) の代わりに„Garant“ (保証人) や „schlechtmachen“ (悪口をいう) の代わりに„diffamieren“ (中傷する) といった外来語(古典語由来の外来語や米語語法)を多用する「第三帝国の言語」へのパロディでもある²⁷⁾。クレンペラーの認識によれば、「第三帝国の言語」は多くの点で外国(語)に由来しているが、一方では、古いドイツ語の表現にも基づいている²⁸⁾。外来語と古いドイツ語の表現を混用するという「第三帝国の言語」の両面性は、

25) Vgl. Fahrke 2008: 15, 19; Klemperer 2009 [1947]: 120.

26) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 92f.

27) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 18, 42, 290ff.

28) Vgl. 宮田 1991: 180ff.; Klemperer 2009 [1947]: 27, 337.

クレンペラーにとって特に興味深い点であったらしく、『第三帝国の言語』の第35章はまるまるこの側面の記述にさかれている。ヒトラーは外来語のなかでも „diskriminieren“ (差別する) と „diffamieren“ (中傷する) を好み、ドイツ語の同義語に置き換えればよいにも関わらず、またこれらの語がどこにも普及していないにも関わらず、あらゆる演説や公報で使用していた、とクレンペラーは主張する²⁹⁾。このことに関して、彼は、ヒトラーの受けた教育をやり玉にあげ、「どの独学者も外来語を誇示してみせるが、何らかの形で外来語がその男に報復するのが常なのだ」(340) と揶揄しているが、その一方で、ゲッベルスによって磨き上げられたヒトラーの外来語の使用には、「カトリックの礼拝におけるラテン語の典礼が持つ機能」(340) のように、大衆に畏怖の念をおこさせるという機能があり、その畏怖の念によって彼らの理解力を減ずるという意図が隠されている、とも指摘している³⁰⁾。外来語についての記述からは、クレンペラーが「第三帝国の言語」に対して抱いている言語意識が、一面的ではなかったことが見てとれる。

3.1.3. 話しことばと書きことば

クレンペラーは、ゲッベルスが得意とした「異質な文体要素を遠慮なく混ぜ合わせてしまう、いや混ぜ合わすだけでなく、学識者っぽいものから田舎者っぽいものへ、冷静なものから説教者の語調へ [...] と相反するものへの急激な跳躍」(343) にこそ、「ナチの言語にかんする技術のもっとも高度で特徴的な点」(ebd.) を見出している。そして、彼は、こうした文体要素間の「急激な跳躍」によって、聞き手は批判的に判断する余裕を失ってしまうのだ、という³¹⁾。その一方で、書きことばと話しことばという対立関係においては、両極端の文体を混用するという上記の特徴とは対照的に、クレンペラーによれば、『第三帝国の言語』には、話しことばと書きことばの区別がなかった」(35)。なぜなら、「その言語においてはすべてが演説 [...]」(ebd.) であり、論文さえも演説口調で書かれていたからである。彼は、この演説口調を「市場で叫ぶ物売りのようなアジテーターの文体」

29) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 338. ただし、高田 (2011) の統計調査によれば、NSDAP の政権獲得前、獲得後ともに、どちらの外来語もヒトラーの演説でとくに頻繁に用いられたという結果は出ていない。高田 2011: 122 参照。

30) Vgl. 宮田 1991: 175; Klemperer 2009 [1947]: 339f.

31) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 344.

(36) と断じ、こうした文体でのみ言語が使用されることを、「第三帝国の言語」の文体的な貧困の原因とみなしていた³²⁾。もっとも、クレンペラーの認識とは違い、実際のヒトラーの演説では、「市場で叫ぶ物売りのような」日常的な話しことばだけではなく、官庁用語などの非日常的な書きことばも使用されており、それは、NSDAP の本来の意図を非教養層から隠すためだとされている³³⁾。

演説口調に関連して、ヒトラーは『わが闘争』において以下のような言語意識を披露している。彼は、「大衆の受容能力はとても限られていて、理解力は小さく、そのため忘れやすさは大きい」(Hitler 1939 [1925/26]: 198) ので、「どのプロパガンダも民衆的であるべきで、その知的水準は、プロパガンダが向けられる者の中で最も受容能力の限られた者に合わせるべきだ」(ebd.: 197) とする。また、演説口調で熱狂的に訴えかけることについては、「宗教的あるいは政治的な大きな歴史的雪崩を引き起こした力は、太古より、ただ話されることばの魔力だけだった。[...] しかし、情熱をうちに秘めたものだけが、情熱を呼び起こすことができる」(ebd.: 116) と主張している。クレンペラーは、熱狂的な演説口調のみによって個人や集団を扇動しようとする「第三帝国の言語」を貧しいとみなしたが³⁴⁾、この「貧しさ」こそが大衆扇動のためにヒトラーが意図していたものなのではないか、と思われる。

3.1.4. 誇張表現

誇張表現もまた、「第三帝国の言語」において大衆扇動のために多用された³⁵⁾。なかでも、クレンペラーは、過大なあるいは過小な数字を用いる「数の悪用」(100) を指摘している。たとえば、『わが闘争』には以下のような表現がみられる。

すべての文学上の汚物、芸術上の悪趣味、劇場の痴呆の 10 分の 9 が、この国の人口の 100 分の 1 にもならない民族 [ユダヤ人] の債務勘定に記されているという事実は、容易には否定できなかった。(Hitler 1939 [1925/26]: 62. 下線部筆者)

32) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 35f.

33) 宮田 1991: 158ff.および高田 2011: 108f.参照。

34) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 36f.

35) Vgl. 宮田 1991: 165ff.; Klemperer 2009 [1947]: 83.

クレンペラーは、自らのギムナジウム時代の思い出話（9 つしか見つからなかった記念碑を 100 あると大げさに述べたこと）を引き合いにだし、大げさな数字を述べることを批判している³⁶⁾。その他に、誇張表現のために特に多用されていた語彙として彼が挙げているのは、„historisch“（歴史的な）、„einmalig“（一度きりの）、そして„ewig“（永遠の）である。このうち、彼は、„ewig“を神聖なもののみつけられるべき形容詞であり、„das ewige Reich der Deutschen“（ドイツ人の永遠の帝国）のような表現は誇張表現であると同時に宗教的な表現でもあるとみなしている³⁷⁾。この„ewig“の例にみられるように、「第三帝国の言語」が、NSDAP をたんなる政治組織ではなくあたかも宗教団体に、その党首にすぎない人物をあたかも救い主に誇張し、神聖化する機能をもっていたことを、クレンペラーは繰り返し指摘しているが、このことについては以下の社会言語学的な次元で扱うこととする。

3.2. 社会言語学の次元

社会言語学の次元では、「第三帝国の言語」がどのような社会集団の使用する言語として認識されていたのかを考察する。

3.2.1. 模倣物としての「第三帝国の言語」

この次元において、なによりもまず先にとりあげなければならないのは、「第三帝国の言語」の語彙や語法の多くが新たに創造されたものではない、とクレンペラーが認識していたことである。NSDAP の言語である「第三帝国の言語」は、すでにあつた別の集団の言語を模倣したものにすぎない、と彼は指摘する。とくに強調しているのは、NSDAP がイタリアのファシスト党の模倣であり、ヒトラーの演説も「非ドイツ的」(77) で、ベニート・ムッソリーニ (Benito Mussolini, 1883-1945) の模倣にすぎない、という点である。クレンペラーは、演説を、感情と知性の両方に訴えかける雄弁 (das Oratorische) といかがわしい職業的演説 (das Rhetorische) とに区分し、ムッソリーニもヒトラーもともに職業的演説家にすぎなかったとみなしているが、母語の美しい響きを重んじたムッソリーニにはまだ雄

36) Vgl. Fahrke 2008: 20; Klemperer 2009 [1947]: 100, Kap. 30.

37) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 150.

弁家らしきもあったのに対し、ヒトラーはただひきつったように叫ぶばかりだった、と断ずる³⁸⁾。もともと、„fascis“ (束棒) というラテン語に由来する外来語が、1932年には、ドイツ語に「帰化して」(einbürgern) (69) „Faschismus“と表記されていたように³⁹⁾、この模倣はNSDAPにしっかりと根付いており、(クレンペラーのような意識して観察している者をのぞけば) 同時代のドイツ人には模倣だと認識されていなかった、と見なすこともできる。

ユダヤ人であるクレンペラーにとって、より重大であったのは、「第三帝国の言語」が政治的シオニズム運動の創始者であるユダヤ人作家、テオドール・ヘルツル (Theodor Herzl, 1860-1904) の言語の模倣でもあったことである。「第三帝国の言語」がNSDAPの味方だけでなく、敵対する集団の言語の模倣でもあるという言語意識は、それを言語学的に考察しようとした人物でなくとも、当時のドイツ人の多くが抱いていたものと思われる。それは、「第三帝国の言語」がヒトラーやその一派のオリジナルでないことが、『わが闘争』の中でヒトラー自身によって明言されているからである。『わが闘争』における記述にしたがえば、クレンペラーも言及しているように、ヒトラーが政治宣伝に関心をいだいたのはウィーン時代であり、後には、彼が「ユダヤ式弁証法」(jüdische Dialektik) (Hitler 1939 [1925/26]: 65) と呼んだSPD (社会民主党) による大衆獲得のための宣伝戦術を研究し、自らのものとした⁴⁰⁾。興味深いことに、ヘルツルは、「第三帝国」の時代、クレンペラーをはじめとして、シオニズム運動に関心のないユダヤ人たちには無名の人物であった。そのため、「われわれを放り出せ」というスローガンをきっかけに、ヒトラーは「第三帝国の言語」をヘルツルから学んだのだ、と知人から指摘されたとき、クレンペラーは困惑する。そして、彼がヘルツルの著書を手し、その言語とヒトラーの言語との共通性 (たとえば、„historisch“ という語の多用など) を実際に見出したさいには絶望している。両者の言語には相違点 (たとえば、両者とも„untermenschlich“ という語を使用しているがその用法が違うなど) もあると主張し、「天才ではないが、温かい心をもった興味深い人物」(281) とヘルツルを擁護しているが、いずれにしても、クレンペラーは、ヘルツルが「言い回しや

38) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 69f., 72ff., 77.

39) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 69.

40) Vgl. Hitler 1939 [1925/26]: 44ff., 54ff., 59ff., 65ff.; Klemperer 2009 [1947]: 233, 242, 273.

語調」(283)による武器をヒトラーに手渡してしまった、と断じている⁴¹⁾。

教養人であると自認していたクレンペラーでさえ、「第三帝国の言語」を研究するようになってはじめてヘルツルを知った。したがって、(『わが闘争』を読む機会のなかった)同時代のユダヤ人の多くは、「第三帝国の言語」がシオニズム運動の創始者の言語の模倣であるということや、「ヒトラーもヘルツルもともに、きわめて広範囲にわたって同じ遺産〔ロマン主義やシオニズム運動とその運動への反発〕で身を養っている、という問題」(284)を意識してはいなかったと思われる⁴²⁾。

3.2.2. 疑似キリスト教の言語としての「第三帝国の言語」

クレンペラーは、「国家社会主義はひとつの宗教」(50)であり「『第三帝国の言語』の究極の形は、信仰の言語でなければならない」(148)と評している。その彼が、「第三帝国の言語」が模倣したものなかでもとくに強調しているのは、キリスト教、なかでもカトリック教会の言語である⁴³⁾。たとえば、「山をも動かす信念にもひとしい熱狂」(Hitler 1939 [1925/26]: 394)などといった表現が『わが闘争』にみられるが、これは明らかに、『マタイによる福音書』(17章20節)や『マルコによる福音書』(11章23節)を踏まえたものである。また、クレンペラーは、「第三帝国の言語」の熱狂的な演説口調を司祭による説教の言語に例えている⁴⁴⁾。すでに誇張表現に関連づけて述べたように、「第三帝国の言語」にはヒトラーやNSDAPを神聖化する機能もあった。「第三帝国の言語」は「福音書の言語を利用し」(160)、ヒトラーは「救世主」(Heiland) (150)に擬せられ、ナチズムのための死者はキリスト教のための「殉教者」(Blutzeuge) (149)や「使徒」(151)に例えられている⁴⁵⁾。そして、シオニズム運動の言語の模倣とは違い、こちらの模倣の意図は、NSDAPとその言語が模倣される集団との類似性が認識され、同一

41) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 64, 272ff., 279ff., 283f.

42) ナチズムとロマン主義の関係については、Klemperer 2009 [1947]: 186, 193, 202, 209, 288も参照。

43) Z. B. vgl. 宮田 1991: 186ff.; Klemperer 2009 [1947]: 37, 148f. この点に関し、宮田 (1991) は、党大会などでの演出ではカトリック教会の祭儀や神秘主義が、「第三帝国の言語」についてはルター聖書の言語が模倣された、としている。宮田 1991: 221 参照。

44) Z. B. vgl. 宮田 1991: 127, 186ff.; Klemperer 2009 [1947]: 76f., 152.

45) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 55f., 149ff.

視されることにあった。言い換えるならば、「第三帝国の言語」を通じて、NSDAPとその思想は、ドイツ人に根付くキリスト教とその教会にすり替わろうと試みたのだ。この試みは、第8章や第18章でクレンペラーが紹介するヒトラーへの「信仰」を告白する人々の例や、ヒトラーの演説で「自然に」(natürlich) (151)「アーメン」ということばが使用されていたという例をみる限りでは、一定の成功を収めていたといえる。クレンペラーは、戦前だけでなく、敗戦間近においても、ヒトラーを「信じる」(glauben)と公言する人々にしばしば出会っている⁴⁶⁾。彼らの言語意識のうえでは、NSDAPとキリスト教とは同一のものだった⁴⁷⁾。

3.2.3. 「第三帝国の言語」とNSDAPとの結びつきに関する意識

「第三帝国の言語」がNSDAP(とその思想)と結びつけられ、その結びつきが意識されて用いられていた様々なケースを、クレンペラーは紹介している。すでに述べたように、上記の「信者」のようにNSDAPへの「信仰心」から「第三帝国の言語」を使用する者もいたし、また、略語の多用を揶揄したベルリン市民のようにNSDAPへの反発から「第三帝国の言語」を用いる者もいた。さらに、クレンペラーが強制労働に従事していた工場の班長Fは、ユダヤ人でありながら「第三帝国の言語」をつよく意識しそれを模倣するという奇癖があった⁴⁸⁾。その一方で、このように意識的に使用されるケースに対し、「単調で日常的な」(251)語彙の場合には「第三帝国の言語」とNSDAPとの結びつきが意識されずに、敵対関係にあるユダヤ人やカトリック教徒によって使用されるケースもあった⁴⁹⁾。クレンペラーは、このようなケースにこそ「第三帝国の言語」のもつ危険性があると指摘する。たとえば、ナチズムに反発して引退したある敬虔なカトリック教徒の元校長は、„Sippe“ (血族) という一語によって「第三帝国の言語」の影響を受けていることが明確になったし、クレンペラーが工場で知り合った親切な婦人

46) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 76, 142ff., 147.

47) こうしたいわゆる「ヒトラー神話」は、終戦間際まで存在していた一方で、戦況の悪化した1943年にはすでに「神話」の崩壊がみられ、ヒトラーは公然と嘲笑や憎悪の対象にもなっていた。Vgl. 宮田 1991: 243, 276; Klemperer 2009 [1947]: 153f.

48) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 259ff.

49) クレンペラーは、カトリック教会がヒトラー政権と「宿敵関係」(Todfeindschaft) (368)にあったと明言している。実際、カトリシズムが民衆の日常生活に根付いていた地方では、教会を敵視するナチズムに対する反発が強かった。宮田 1991: 260 参照。

は、彼女がただ耳にしていただけの„artfremd“（異種の）や„deutschblütig“（ドイツの血の）といった語彙を深い考えもなく使用し、ユダヤ人であるクレンペラーを傷つけた⁵⁰⁾。また、すでに述べたように、この言語を批判的に観察していた彼自身でさえ、無意識に„holen“（（秘密国家警察が）連行する）という語を使用している⁵¹⁾。つまり、クレンペラーのことばを借りれば、「ナチはいなかったが、みな毒されていた」（131）し「誰もが、文字通り、誰もが [...] 同じ『第三帝国の言語』を話していた」（348）のである。上述したように、クレンペラーは「第三帝国の言語」の創造者をゲッベルスだと見なしていたが、この宣伝大臣は、プロパガンダはプロパガンダだと認識された瞬間に機能しなくなると考えていた⁵²⁾。クレンペラーが危険視したタイプの、すなわち、NSDAP との関連が意識されずに浸透していく「第三帝国の言語」こそが、ゲッベルスにとっての理想的な「第三帝国の言語」だったといえるだろう。

4. 結び

クレンペラーの記述からは、彼がかけていた「ユダヤ人の眼鏡」の影響は見いだせず、むしろ、彼は、自分の身近にいたユダヤ人や（「アリア系」）ドイツ人、キリスト教徒たちの言語意識に、中立な観察者としての視線をむけていたように思われる。そして、クレンペラーが「第三帝国の言語」と見なした言語は、ヒトラーやゲッベルスの演説における「市場で叫ぶ物売りのような」（36）ものだけではなかった。それは、クレンペラー自身や彼の同時代人に、さまざまな異なる機能をもつものとして認識されていた。その一部は、たとえば隠蔽工作のための略語のように、NSDAP らしい言語と認識されて嘲笑のために使用され、また、その一部は、キリスト教会との結びつきが強く意識されて「信仰告白」に使用された。しかし、その一方で、クレンペラーがもっとも危険視し、自らの著書を通じてその「毒」（27）を意識させようとしたのは、その言語の使用者がその言語と特定の社会集団との結びつきを意識していない⁵³⁾、というタイプの「第三帝国の言

50) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 109, 128.

51) Vgl. Klemperer 2009 [1947]: 366.

52) Vgl. Reichel 1999: 180.

53) このような社会言語学的な次元における言語意識の欠如については、金水（2003）の「役割語」の概念を用いることで、以下のように説明しなおすことができるだろう。金

語」であった。このタイプの「第三帝国の言語」は、中立な観察者を自認する彼自身さえも意識しないうちに浸透していった。クレンペラーが認識していたように、「第三帝国の言語」は様々な、ときにはまったく相反する文体要素の合成物であった。あまりにも多くの色を混ぜるとそれぞれの色味は失われて結局は黒一色になってしまうように、「第三帝国の言語」もそれを構成する文体要素の多さのあまり、逆にその言語を構成する個々の文体要素の色が失われ、言語意識のうえでは無色となって人々の間に浸透していったのだろう。

今回の調査で明らかになったように、「第三帝国の言語」には同時代人に認識されていたものや、認識されていなかったものを含め、様々な側面があった。この多様性については、クレンペラー以外の同時代人の記述などを基に、さらに調査する必要があるだろう。この点を、今後の課題としたい。

水 (2003) は、「ある特定の言葉づかい [...] を聞くと特定の人物像 [...] を思いうかべることができる時、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思いうかべることができる時、その言葉づかいを『役割語』と呼ぶ」(金水 2003: 205)。そして、特定の人物像や言語を想起させる度合いを「役割語度」(金水 2003: 67)と呼んでいる。特定の言語がいつさいの人物像を想起させない場合、その言語は「役割語度 0」(金水 2003: 68)であり、この「役割語度 0」の言語には、言語の読み手、聞き手を言語の話し手に自己同一化させる機能がある。金水 2003: 67 以下参照。

一次文献

Klemperer, Victor (2009 [1947]): *LTI. Notizbuch eines Philologen*. Stuttgart: Reclam. (クレムペラー、V. v. (2000 [1974]) 『第三帝国の言語〈LTI〉』(羽田洋他訳) 法政大学出版局)

二次文献

- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店。
- 高田博行 (2011) 「時間軸で追うヒトラー演説—コーパス分析に基づく語彙的特徴の抽出」、学習院大学ドイツ文学会『研究論集』第15号、89～159ページ。
- 羽田洋他 (2000 [1974]) 「解説」、クレムペラー、V. v. 『第三帝国の言語〈LTI〉』(羽田洋他訳) 法政大学出版局、417～430ページ。
- 細川裕史 (2009) 「社会語用論的語史研究とはなにか?—社会コミュニケーションとしての語史に関する一考察」、学習院大学ドイツ文学会『研究論集』第13号、67～94ページ。
- 宮田光雄 (1991) 『ナチ・ドイツの精神構造』岩波書店。
- Eggers, Hans (1963): *Deutsche Sprachgeschichte*. Bd.1. Hamburg: Rowohlt.
- Elbers, Helmut (1999): *Intentionen, Entstehungsprozess und Wirkung von Victor Klemperers „LTI“*. Duisburg: Gerhard-Mercator-Universität.
- Elspaß, Stephan (2005): *Sprachgeschichte von unten. Untersuchungen zum geschriebenen Alltagsdeutsch im 19. Jahrhundert*. Tübingen: Niemeyer.
- Fährke, Linda (2008): *Lingua Tertii Imperii. Die Sprache des Nationalsozialismus anhand Klemperers LTI*. Norderstedt: Grin.
- Hitler, Adolf (1939 [1925/26]): *Mein Kampf*. München: Franz Eher.
- Kilian, Jörg (2005): *Historische Dialogforschung*. Tübingen: Niemeyer.
- Mattheier, Klaus J. (1998): Kommunikationsgeschichte des 19. Jahrhunderts. Überlegungen zum Forschungsstand und zu Perspektiven der Forschungsentwicklung. In: Dieter Cherubim u.a. (Hg.): *Sprache und bürgerliche Nation*. Berlin/ New York: de Gruyter, S. 1-45.
- Polenz, Peter v. (1972): *Geschichte der deutschen Sprache*. Berlin/ New York: de Gruyter.

- Polenz, Peter v. (1999): *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart*. Bd.3. Berlin/ New York: de Gruyter.
- Polenz, Peter v. (2000): *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart*. Bd.1. 2.Aufl. Berlin/ New York: de Gruyter.
- Reichel, Peter (1999): *Der schöne Schein des Dritten Reiches*. München: Carl Hanser.
- Scharloth, Joachim (2005): *Sprachnormen und Mentalitäten. Sprachbewusstseinsgeschichte in Deutschland im Zeitraum von 1766 und 1785*. Tübingen: Niemeyer.

(ほそかわ・ひろふみ 学習院大学文学部助教)

Sprachbewusstsein über die Sprache des Nationalsozialismus

Eine Fallstudie am Beispiel von V. Klemperers „*LTT*“ (1947)

HIROFUMI HOSOKAWA

Im Bereich der germanistischen Sprachgeschichtsforschung wurde vorher hauptsächlich die Sprache der führenden sozialen Schichte behandelt. In Bezug auf die NS-Zeit wurde und wird die Sprache des Nationalsozialismus, vor allem die Rede von A. Hitler und J. Goebbels als eine repräsentative Sprache der Zeit auf verschiedenen Dimensionen untersucht. In jüngeren soziolinguistischen Arbeiten lenkt man seine Aufmerksamkeit aber auch auf die alltägliche Sprache von nicht privilegierten Ständen und nicht nur auf die damals gebrauchte Sprache selbst, sondern auch auf ihr Sprachbewusstsein. In dieser Arbeit wird daher versucht, eine Seite des Sprachbewusstseins über die Sprache des Nationalsozialismus in der NS-Zeit anhand von V. Klemperers „*LTT*“ (1947) zu rekonstruieren, in dem er die Sprache des Nationalsozialismus die „Sprache des Dritten Reiches“ nennt.

Es war für Klemperer, der als Jude in der NS-Zeit seine Stelle als Professor verloren hatte, sehr wichtig, sich durch diese Forschung über die Sprache des Nationalsozialismus bewusst zu werden, dass er nach wie vor akademisch tätig sein kann. Daher behauptet er in seinem Werk wiederholt, dass er als Philologe „wissenschaftlich“ die Sprache des Nationalsozialismus beobachtete und untersuchte. Klemperer stellt andererseits auch das „alltägliche“ Sprachbewusstsein seiner Zeitgenossen dar: Beispielsweise schildert er das „Alltagssprechen“ unter Juden und, wie er selbst mit „arischen“ Deutschen kommunizierte. In dieser Hinsicht ist Klemperers „*LTT*“ als eine der wichtigsten Quellen für die soziolinguistische Untersuchung zur Sprache des Nationalsozialismus zu werten.

Nach Klemperer wurde die Sprache, die er die „Sprache des Dritten Reiches“ nennt, von seinen Zeitgenossen sehr unterschiedlich erkannt und hatte in ihrem Sprachbewusstsein verschiedene Funktionen. Einerseits wurde diese Sprache mit der

Sprache der katholischen Kirche identifiziert und von Nachfolgern der NSDAP beim Glaubensbekenntnis verwendet (z. B. religiöse Wörter), andererseits wurde sie mit der Politik der NSDAP assoziiert und als lächerlich empfunden (z. B. die häufig verwendeten Abkürzungen). Was Klemperer besonders betont, ist das geistige „Gift“ einer Art der „Sprache des Dritten Reiches“, deren Zusammenhang mit einer bestimmten sozialen Schicht im Alltag unbemerkt war. Solche Sprache, die selbst Klemperer unbewusst gebrauchte, verbreitete sich damals auch unter Personen, die gegen die NSDAP waren. Die „Sprache des Dritten Reiches“ besteht aus verschiedenen stilistischen Elementen und umfasst sogar auch Elemente, die den anderen entgegenstehen (z. B. der gelehrte und der proletenhafte Stil). Angenommen wird, dass es für Klemperers Zeitgenossen wegen der enormen stilistischen Vielschichtigkeit der „Sprache des Dritten Reiches“ schwierig war, einzelne sprachliche Elemente dieser Sprache und ihr „Gift“ wahrzunehmen, und sie sich daher unbemerkt unter ihnen verbereitete.

